

⑱ Candi Mendut

理工学部 2 年

1. 歴史の概要

ムンドゥット寺院は、仏教大乘（マハーヤーナ）の教えに基づいて 9 世紀頃に建立された石造の仏教寺院である。『カルタング碑文』という古代ジャワのマタラム王国時代に作られた王の命令や宗教政策などを刻んだ石碑（碑文）には「Venuvana」という名で言及されており、これは「竹林の寺」を意味すると考えられている。建築様式や彫刻の特徴から、ポロブドゥルやパオン寺院と同じく、シャイレンドラ王朝の時代に築かれたとされる。19 世紀になるとオランダ領東インドで再び注目され、1834 年には調査・修復の動きが始まった。その後、1901 年から 1904 年にかけてオランダ人考古学者 J.L.A. Brandes や技師 Theodoor van Erp によって本格的な修復が行われ、現在の姿に近い形が再現された。



2. 利用・役割

ムンドゥット寺院は単なる建造物ではなく、宗教儀礼に用いられていた。特に重要なのは仏教の最大行事の一つであるワイシャック祭との関わりである。この祭りは釈迦の誕生・成道・入滅を記念する行事で、毎年 5～6 月の満月の日に行われる。現在でもムンドゥット寺院は、パオン寺院を経てポロブドゥルへと続く巡礼の出発点となり、多くの僧侶や信者が行進する姿が見られる。こうして寺院は、過去から現在に至るまで、信仰の実践の場として生き続けている。

3. 建物と彫刻

寺院の基壇は 33.8 メートル四方、高さ 13.7 メートルと比較的小規模だが、構造は堅固である。基壇を上がる階段の両脇には獅子像が置かれ、壁面にはジャータカ物語やパンチャタンマ（五つの徳）の場面が浮き彫りにされている。これらのレリーフは釈迦の輪廻や善行を説く寓話を伝えており、参拝者に教訓を与える役割を果たしていた。内部の主室には三体の大きな仏像が安置されている。中央には蓮華座に坐る釈迦如来（バヤマ・チャクラムヴァラナ像）があり、その両側には菩薩像として弥勒菩薩（マイトレーヤ）と観音菩薩（アヴァローキテーシュヴァラ）が配置されている。釈迦像の足が露出した形で彫られている点は珍しく、インド・東南アジアに広く見られる仏像様式の中でも特筆される。さらに寺院はボロブドゥルの方向を意識して建てられており、三つの寺院（ムンドゥット・パオン・ボロブドゥル）が一直線上に並んでいる。この配置は、当時の宗教思想に基づく宇宙観の表現だと考えられている。

4. まとめ

ムンドゥット寺院は、9 世紀に築かれたジャワ島の仏教寺院の中でも重要な存在である。歴史的にはシャイレンドラ王朝の仏教信仰を象徴し、建築やレリーフはその思想を視覚的に伝えている。宗教的にはワイシャック祭をはじめとする巡礼の出発点として、古代から現代まで信仰の中心であり続けてきた。修復を経て現在も人々の祈りの場となっているムンドゥット寺院は、ボロブドゥルを含むジャワの仏教遺産を理解する上で欠かせない存在であり、芸術・歴史・信仰が交差する貴重な文化財である。今回は修復作業を行なっており（風化や劣化が進行しているため）中に入ることは出来なかったが、いつか中を見てみたいと思う。